

孤独からの解放：『トムは真夜中の庭で』と『まぼろしの小さい犬』における子どもの願望

原田，洋海
九州大学人文科学府修士課程

<https://doi.org/10.15017/20041>

出版情報：九大英文学．52，pp.21-38，2010-03-31．九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：

孤独からの解放

『トムは真夜中の庭で』と『まぼろしの小さい犬』における子どもの願望*

原田 洋海

序

フィリパ・ピアス (Philippa Pearce 1920-2006) は、代表作である『トムは真夜中の庭で』(*Tom's Midnight Garden* 1958) がイギリスの児童文学賞であるカーネギー賞を受賞しており、二十世紀を代表するイギリス児童文学作家だと言われている。ピアスは決して多作な作家ではないが、長編と短編の両方で才を発揮し、中でも『トムは真夜中の庭で』は戦後の児童文学作品の傑作として評価されている¹。『トムは真夜中の庭で』に関しては、時間論や楽園としての真夜中の庭という観点から論じられることが多い。しかし、デイビッド・リーズ(David Rees)やマーガレット・ミーク(Margaret Meek)が“heart's desire”という観点からピアスの作品を論じているように²、ピアスの作品には子どもの願望という主題も組み込まれているのである。特に『トムは真夜中の庭で』と『まぼろしの小さい犬』(*A Dog So Small* 1962) では、内的世界という手法を用いることによって、子どもの願望という主題がより強調されている。しかしながら、これまでの研究では子どもの願望の強さにしか着目されてこなかった。彼らの願望が彼らを内的世界に導いてしまうほど強力なものであることは明白であり、それだけでなく、子どもたちが現実世界と内的世界を往来することで願望の実現と失望を経験し、さらには願望の対象を変化させるなど、願望という主題に関しては考察を深めるべき点のほかにもある。彼らの願望はただ強力なだけの静的な願望ではなく、二つの世界を通して常に揺れ動いている動的な願望だと考えることができるのである。本稿では、『トムは真夜中の庭で』と『まぼろしの小さい犬』における主人公たちの願望の強さだけでなく、内的世界を通して移ろう彼らの動的な願望についても考察していく。

1. 二作品の類似性

『トムは真夜中の庭で』が一般にタイムファンタジーと呼ばれているのに対して、わずか四年後に書かれた『まぼろしの小さい犬』は主人公の強い妄想を描いたりアリスティックな作品である。一見趣を異にしているように見えるこれらの作品は、子どもの願望と内的世界という主題において共通しており、その物語構造もまた類似している。デイビッド・リーズはこれらの作品に関して、“The construction of *A Dog So Small* is interesting . . . Like *Tom's Midnight Garden* it opens with the hero's world crashing about his ears.” (Rees 46) と述べているが、彼は二作品の冒頭のみに着目しており、作品全体に見られる類似性には言及していない。以下、作品の内容に触れながらこれらの作品の類似性について考察していく。

『トムは真夜中の庭で』はトムの失望の場面から始まる。トムは休暇中に弟のピーターと自宅の庭にツリーハウスを作る計画を立てていたが、ピーターが麻疹にかかってしまったため、トムは親戚のキトスン夫妻の家に預けられることになり、その計画は実現できなくなる。キトスン夫妻には子どもがおらず、彼らが住んでいるアパートには庭がない。そのような状況下でトムは暇を持て余し、遊び相手と遊び場所を強く望むようになるのである。ある夜、アパートのホールにある古い箱時計が存在しえない十三時を告げたとき、トムは時計の針が何時を示しているのかを確かめるためにホールへ降りていき、月明かりを入れるために裏口を開ける。そこにはロング家の庭とは比較にならないほどすばらしい庭園が広がっており、後に彼はハティという少女に出会う。トムは真夜中にだけ現れるその庭を毎晩訪れ、ハティと遊んで過ごす。やがて、トムは真夜中の庭にいる間は現実世界では時間が進んでいないことに気づき、永遠に真夜中の庭に留まろうと考えるが、家に帰る日の前夜に真夜中の庭に行けなくなってしまう。トムは真夜中の庭とハティを失ったことに激しく取り乱すが、翌朝、前日の騒ぎを詫げるために家主のパーソロミュー夫人を訪ねたところ、彼女がハティと同一人物であることが判明するのである。

一方『まぼろしの小さい犬』では、ベンの誕生日の朝から始まる。彼は誕生日プレゼントとして犬をもらえることを祖父と約束していたが、実際に贈られたのは刺繍の施された犬の絵であった。ピアス自身が述べているように、犬に対するベンの願望はこの小説の中心となっており³、彼の感情の推移が綿

密に描かれているのである。ベンは犬がもらえず失望し、さらに強く犬を欲するようになる。やがて、本物の犬の代わりにもらった刺繍の犬の絵から、チキチトというチワワ犬を想像し、目を閉じればいつでもその犬が見えるようになる。彼はどこでもチキチトを見ようと目を閉じ、ついには交通事故に遭い、それ以来チキチトが見えなくなってしまう。ベンが退院した後、ブリューイット家は北ロンドンへの引越しを決める。その近所にはハムステッド・ヒースがあり、それは犬を十分に運動させられる場所である。ベンはフィッチ家に生まれた子犬ブラウンを譲ってもらうが、その子犬はすでに成長しており、自分の理想の犬として築き上げられたチキチトのイメージとはかけ離れている。ベンはブラウンを置き去りにしてしまおうと考えるが、本物の犬の暖かさや感触を思い出し、ブラウンと共に家路につくのである。

以上のように、『トムは真夜中の庭で』と『まぼろしの小さい犬』において、物語構造に類似性が見られる。主人公のふたりは冒頭で何かを期待しており、それが叶わず失望する。そして、その反動からより強い願望を抱くようになり、内的世界に没入してしまうのである。しかし、内的世界はずっと彼らの前にあるのではなく、最後には消えてしまう。自らの願望が理想の形で再現されている内的世界を失った彼らの失望は冒頭のそれよりも大きい。最後には、理想とは異なるものの現実世界で再度願望を実現させることができるのである。確かにリーズ述べているように、これら二作品の冒頭部分の類似は興味深い。しかし、その類似は作品全体を通して見ることができ、それは子どもの願望という共通する主題を提示しているのである。以下、これらを念頭に置きながら、『トムは真夜中の庭で』と『まぼろしの小さい犬』における子どもの願望について考察を深めていく。

2. 内的世界へ

トムとベンは内的世界に没入するという点でピアスの他の主人公とは異なるが、彼らが内的世界に入り込むのにはいくつかの要因が挙げられる。そのひとつが喪失と失望である。トムは早くも冒頭で、しばらくの間遊び相手であるピーターと遊び場所である自宅の庭から去らねばならなくなる。庭と弟の一時的な喪失と、それによるトムの失望はこの小説の最初のパラグラフから描かれているのである。

If, standing alone on the back doorstep, Tom allowed himself to weep tears, they were tears of anger. He looked his good-bye at the garden, and raged that he had to leave it – leave it and Peter. They had planned to spend their time here so joyously these holidays. (1)

この数行は、期待が裏切られたことに対してトムがいかに失望しているかをよく示している。特に“rage”という言葉が用いられていることは注目に値する。彼の怒りはキトスン家に向かう車中でも収まることを知らず、トムはキトスン氏に失礼な態度を取ってしまう。しかし、トムが隔離されるのはピーターにもロング夫人にもアラン・キトスンにも責任がなく、彼の怒りには捌け口が見出されないのである。車がイーリー大聖堂に着くと、キトスン氏はトムにポストカードを買ってやるが、トムは大聖堂の塔に登らせてもらえずにさらに失望する。彼はピーターと塔に登ることも計画していたのである。

このように、彼が楽しみにしていた計画は最初の数章で全て破綻し、トムの描写も怒りや失望に満ちている。リーズはこれらの章に関して、“The opening chapters seem laboriously written, the character wooden, and measles is certainly not a good reason for packing Tom off to Aunt Gwen’s.” (Rees 40)と述べているが、子どもの願望という主題に焦点を当てた場合、トムの強い願望を生み出す要因のひとつとなる喪失と失望を細かく描いている最初の数章もまた重要になると考えられる。

このような喪失と失望をベンもまた経験している。ベンは誕生日プレゼントに、グレート・デーンやボルゾイなどの大型犬を期待しており、しばしば妄想に耽ることがある。そのようなとき、現実世界は彼の目には見えておらず、ベンがテムズ川の橋で犬のことを考えているとき、彼の意識は想像上のロシアに向けられているのである。ベンは“an ordinary boy” (81)であると書かれているが、彼の想像力は人並み外れたものであり、それに関しては決して“ordinary”ではない。この想像力がベンを失望させる原因となる。様々な大型犬を想像し、犬への憧れを強めていたからこそ、刺繍の犬の絵が送られてきたときの彼の失望は大きなものになるのである。

彼もまた失望だけでなく怒りにも満ちている。それは約束を破られたことへの怒りであり、その矛先は約束を守らなかった祖父のフィッチ氏に向けられる。しかし、ベンはその唯一の怒りの捌け口すらも失ってしまう。という

のも、その絵には手紙が添えられており、最後に“TRULY SORY ABOUT DOG” (16)と書かれているからである。フィッチ氏は“sorry”のスペルを誤っているが、このことは、それが手紙の内容をいつもチェックするフィッチ夫人の言葉ではなく、彼自身が付け足した言葉であることを意味している。このような捌け口のない怒りは、現実世界への失望を強めるのである。

『まぼろしの小さい犬』の第七章には“An End –”というタイトルが、その次の章には“- and a Beginning”というタイトルがつけられているが、これはベンが現実世界から内的世界へ没入していくことを意味している。つまり、彼にとっての現実世界の「終わり」と内的世界の「始まり」である。第七章でベンは初めて想像の犬チキチトを見るが、そのもととなった刺繍の犬の絵は電車内に置き忘れられ、他の乗客に踏まれて破損し、清掃員によってごみとして捨てられてしまう。永遠にその絵を失ってしまったベンは、まるで本物の犬を失ったかのように感じ、絵に描かれていた犬を切望し始めるのである。

このように、トムとベンは物語の冒頭では願望が叶えられず、現実世界への失望を感じる。彼らの経験する喪失と失望は彼らを内的世界に導く重要な要因であると考えられるが、他にも議論すべき要因がある。それは彼らの孤独感である。トムは数週間キトスン家のアパートに滞在しなければならないが、キトスン夫妻にも近隣にも子どもがいないため、トムは遊び相手がないのである。そのアパートそのものに関しても、彼に孤独を感じさせるような描写がなされている。

As he looked round, he felt a chill. The hall of the big house was not mean nor was it ugly, but it was unwelcoming. . . the heart of the house was empty – cold – dead. . . It remained empty and silent – silent unless one counted the voice of Aunt Gwen . . . (5)

物語の舞台となるアパートは、よそよそしくもの寂しい、死んだような館として描かれおり、トムは寒気を感じている。決して魅力的ではない館で、遊び相手もおらず、トムはピーターに手紙を書くことしかやることがない。そして、遊び相手と遊び場所を強く求めるようになるのである。

また、トムだけでなくハティも遊び相手を求めている。彼らの共通した願望が夢を通しての時間移動を引き起こしており、孤独感から遊び相手を求め

ることが子どもたちを内的世界に引き込む最大の要因のひとつであると考えられる。ここで、ハティについても詳しく触れておく必要がある。ハティは幼い頃に両親を亡くしており、親戚であるメルバン家に孤児として引き取られる。それ以来彼女はずっと孤独であり、パーティと結婚したときに初めて孤独感から解放されるが、二人の息子が戦死し夫にも先立たれ、アパートの住民に恐れられながらパーソロミュー夫人として独りで暮らしているのである。メルバン家に移ったばかりのハティは、メルバン夫人に冷たくされ、従兄達にも仲間はずれにされるなど、独りでいることが多くある。彼女はトムに次のように語っている。

‘I am held here a prisoner. I am a Princess in disguise. There is someone here who calls herself my aunt, but she isn’t so: she is wicked and cruel to me. And those aren’t my cousins, either, although I have to call them so.’ (76)

これは、彼女がメルバン家で孤立していることを示すだけでなく、自分自身を囚われの王女と名乗るなど、孤独感が彼女の想像力をかき立てていることをも示している。トムが妖精の王宛に書かれた手紙を見つける場面があるが、これもまた彼女の想像力を示しているといえるだろう。ハティはトムと同様に喪失と孤独を経験している。しかし、彼女にとっての喪失とは、トムとピーターのような一時的な別れではなく、家族との永遠の別れであり、その孤独感は彼女の結婚式の日まで続くのである。

ベンの孤独感はトムやハティとは異なる。彼らは誰かとの離別によって孤独になるが、ベンはそうではない。彼は家族と共に暮らしながら孤独感を抱いているのである。ブリューイット家は七人家族で、ベンは五人姉弟の三人目だが、姉二人と弟二人がそれぞれ年齢が近いため、ベンはしばしば独りになることが多くある。彼の弟たちは鳩や白ネズミなどのペットを飼っているが、ベンはそのようなペットを遊び相手としてはみなさず、幼稚なペットだと考えている。彼が望んでいるのは、“a mature, intelligent creature-companion” (15)としての犬なのである。上記のように、彼は様々な大型犬を想像しており、それによって孤独から気を紛らわせている。しかし、刺繍の犬の絵が送られてきたとき、“At the breakfast-table borzois, bloodhounds, Irish wolfhounds,

and all the rest had vanished together, and Ben returned to loneliness.” (14)と、彼は再び孤独感に陥るのである。

トムとハティ、そしてベンは共通して孤独な状況にあり、それゆえに内的世界に没入してしまう。彼らの周りには親切にしてくれる人々がいるが、そのような人々は大人であり、決して彼らの遊び相手としてみなされない。彼らが求めているのは孤独感を満たしてくれる仲間なのである。彼らの強力な願望は喪失と失望そして孤独感から生じたものであり、それらが彼らを現実世界から遠ざけ、内的世界に導く要因になっていると考えられる。

トムとベンは遊び相手だけでなく遊び場所も必要としている。トムはピーターと離れなければならないのと同様に、庭を離れなければならないことにも失望している。ロング家の庭は小さいが、子どもが遊ぶには十分の広さがあり、トムとピーターは実をつけないリンゴの木に登ることを許されている。一方、キトスン家のアパートには庭がなく、あるのは木のフェンスに囲われた、舗装された空間だけであり、それは決して子どもの遊び場所にはなりそうにない。そのような状況下で、“It seemed to him that his longing to be free swelled up in him and in the room, until it should surely be large enough to burst the walls and set him free indeed.” (14)と、庭で遊びたいという願望が強くなるのである。

ベンの住んでいるロンドンでは、交通量が激しくペットを飼うには適していない。ベンは道路を横切ろうとして車に轢かれそうになる猫を目撃し、都会で犬を飼うことの難しさを実感させられる。現実世界で犬を飼うにはそれを運動させられるような広い空間が必要なのである。この小説において大きさという概念は重要であるように思われる。ベンは決して大きな少年ではなく、ビッグ・ベンと同じ名前であることを家族にからかわれる。これが、彼が犬を想像するときにあえて大型犬を選ぶ理由のひとつのようである。大型犬を想像するとき、それはいつもヒーローのように勇敢であるが、そのような大きな犬を想像するためにベンはテムズ川の見晴らしのいい橋へ行く。そこが大型犬のことを考えるのに最も適した場所だからである。一方、チキチトにはそのような広い空間は必要ない。その名前は「非常に小さい」ことを意味する。ジェリー・グリズウォルド (Jerry Griswold) は「小ささ」を児童文学の五つのテーマのひとつとしており⁴、「小さい」ことは不利な条件である一方、ピーター・ラビットやスチュアート・リトルを、不利を有利に変えられるこ

との例に挙げている。チキチトもまた「小ささ」を、ロンドンに適應できる有利な点として持っているが、ベン「の「小ささ」は家族にからかわれるだけである。したがって、「小ささ」を有利に変えられるチキチトはベン「の理想でもある。しかし、チキチトが見えなくなり現実世界に戻ると、結局は本物の犬を飼うために広い空間が必要になるのである。ベンはトムのように彼自身が空間的に制限されているわけではないが、犬を飼うという点においては空間的に制限されていると言える。

トムとベンは遊び相手や犬を求めているが、それだけでなく遊ぶための、あるいは犬を運動させるための庭、広い空間をも必要としている。『トムは真夜中の庭で』に登場する館と庭がピアスの生家とその庭をモデルにしていることは有名であるが、この小説を書き始めるきっかけとなったのがその館と庭の売却であった。ピアスは作品の中にそれらを描いたのである。庭園はトムやベンにとってと同じように、彼女にも必要だったのである。

3 . 内的世界における願望の実現とその喪失

では、彼らの願望は内的世界でどのように満たされているのであろうか。真夜中の庭には、少年の好奇心をくすぐるような登り甲斐のある木があり、ロング家の庭よりもはるかに広い。さらにそこでは、その庭のことを知り尽くしている、トムの尊敬に値する少女と遊ぶことができるのである。トムの願望はハティによって満たされている。トムはツリーハウス作成や、木登り、イーリー大聖堂の塔に上ることなど、ピーターと一緒にを行う予定であったことを全てハティと一緒に経験するのである。また、冒頭ではぎこちなかったトムの描写が庭園では非常に生き生きしている。以下の引用は初めて真夜中の庭を目にしたときの描写である。

He would run full tilt over the grass, leaping the flower-beds; he would peer through the glittering panes of the greenhouse – perhaps open the door and go in; he would visit alcove and archway clipped in the yew-trees – he would climb the trees and make his way from one to another through thickly interlacing branches. When they came calling him, he would hide, silent and safe as a bird, among this richness of leaf and bough and tree-trunk. (21)

“run”や“leap,” “climb”という言葉が示すようにトムは本来活発な少年であり、このときのトムは、家を離れなければならないと失望していたときの彼とは対照的である。また、トムはハティが答えにくいような質問をしようと考えるが、いざ庭へ行くと詮索することを忘れ、純粹で活発な少年になるのである。

ベンは刺繍の犬の絵を三回しか見ていないにも拘らず、それからチキチトという名のチワワ犬を想像する。その犬はまるで本物の犬のようで、身体は小さいが大型犬に劣らず勇敢である。また、バスや電車に乗ることもでき、都会の汚い川に飛び込み、騒音をもともしないベンの理想の犬である。ベンの内的世界はトムのものとは異なり、ベンが目を閉じることによって現実世界を背景にチキチトを見ることができるのである。しかし、チキチトはしばしば凶暴になる。冒頭でベンが想像したロシアではボルゾイは狼を打ち負かしたただけであり、猟師がとどめを刺す想像も途中でやめてしまうが、チキチトは百匹もの狼を殺してしまうのである。また、チキチトはベンが本から得た情報に基づいて身体の色を変化させるが、その黒い身体は大胆さを象徴している。チキチトが狼を殺すときやバスを飛び降りたり乗ったりするとき、そしてベンの交通事故を引き起こしたときもチキチトの身体の色は黒である。ベンがチキチトの大胆さを勇敢さだと考えているが、実際はベンを危険に晒しうる危険なものでもある。

ベンは“a mature, intelligent creature-companion”を求めていたが、“companion”という言葉はベンと犬にとって重要であるように思われる。第八章にベンとチキチトの“companionship”が始まったと書かれているが、ベンは内的世界で“companion”への願望を叶えることができたのである。図書館の本にチワワが食用であると書かれているのを見つけたとき、ベンは自分も食べられそうになる夢をみる。

‘People with sort of toasting-forks were chasing *us*, to catch *us* and cook *us* and eat *us*. And they’d fattened *us* up first.’ (67-68, emphasis mine)

ベンはフォークを持った人々が自分たち(us)を食べようとする夢を見ており、自分とチキチトが非常に近接な関係にあること、いわば彼らの“companionship”を表しているのである。

トムとベンは内的世界で願望を満たしているが、それは完全には満たされ

ていない。というのも、彼らは内的世界のものに触れることができないからである。トムは真夜中の庭では実体のない存在である。折れそうな枝に乗ることができ、空気銃の弾が当たっても無傷で、閉まっているドアをすり抜けることもできる。このような状況は現実世界を超越しているようにも思われるが、ツリーハウスや弓矢を作成するときは実際に作業することができず、ハティに指示を出すだけである。

ベンもまた目を閉じて彼の想像の犬を見ることはできるが、それに触れることはできない。チキチトに関しては視覚的な描写、特にその色に関するものが多く、ベンもチキチトの動きを見ることはあっても、実際に触れる描写は一度もされていないのである。一方、ベンがティリーの子犬を撫でるときには、“perfect happiness” (111)を感じる。それらは本物の犬であり、ベンが本当に望んでいたものなのである。

彼らの願望は内的世界に導かれるほどに強く、そこでは彼らは生き生きと描かれている。しかし、彼らの内的世界での願望の実現は、願望の対象に触れることができないという点で不完全なものである。

また、トムとベンも常に内的世界に留まれるわけではなく、必ず現実世界に戻らねばならない。真夜中の庭はパーソロミュー夫人の夢によって現れるので、彼女が大人の頃の夢を見るようになるにつれて、遊び相手を求める願望が弱くなっていくのである。大人になったハティは従兄弟の友人と遊ぶようになり、“I miss you *sometimes*.” (179, emphasis mine)と、ときどきしかトムを必要としなくなる。そのとき、トムの身体はハティには薄く透けて見えるようになり、パーソロミュー夫人が結婚式の日の夢をみた晩にトムは真夜中の庭にいけなくなってしまうのである。

ハティと庭の喪失はトムにとっては悲劇である。最後の晩に裏口を開け、外に足を踏み出した後、トムは自分がヴィクトリア朝の庭園ではなく現代のアパートの裏庭にいることに気づき、犬に追われたネズミのように駆け戻り、ハティを呼び求める。この場面にはトムの絶望と無力さを描かれているのである。しかし、彼は全てを失ったわけではない。二十六章のはじめに、“he had lost his last chance; he had lost the garden” (219)とあるが、彼がハティをも失ってしまったとは書かれておらず、ハティとの再会が暗示されているのである。

ベンも昼夜問わずどこでもチキチトを見ようとし、目を閉じたまま街を歩いて車に轢かれ、その事故の後ベンもチキチトが見えなくなってしまう。彼

もまたトムと同じように内的世界を喪失し、トムが精神的に危機的な状況に陥ったのに対して、ベンは数箇所の骨折や脳震盪などの身体的な危機に晒されるのである。ハティが木から落ちた後、トムは彼女が以前より成長しているように感じるが、木から落ちて怪我をすることを境に、ハティの成長が始まっているのである。マーガレット・ラスティン (Margaret Rustin) とマイケル・ラスティン (Michael Rustin) は“*Illness or the threat of illness are . . . catalysts of growth for the children.*” (30)と述べているが、ここでは病気だけでなく危機的な状況が成長の触媒として働いており、それは彼らを現実世界に引き戻すのである。

内的世界を喪失したとき、彼らは内的世界で実現させたものも失ってしまう。つまり、再び何も得ていない状態に戻るのである。そのような状態は“no”という言葉で強調されている。トムは箱時計の文字盤に刻まれた“Time No Longer”という言葉に興味を抱き、それが何を意味しているのかを考える。彼は時のからくりを解明して真夜中の庭に永遠に留まろうと試みるが、いつも現実世界に帰ってきてしまう。なぞめいたその言葉は、彼が真夜中の庭に留まれる「時間がもうない」ことを意味しているとも解釈できるし、彼が現実世界でハティに再会するまでの「時間がもうない」ことを意味しているとも解釈可能である。どちらの解釈にしても、彼には真夜中の庭での時間はもう残されていない。トムが内的世界を失ったとき、彼はそこでの時間も失っているのである。

ベンの場合はより顕著に“no”という言葉が示されている。事故の後、彼は意識と無意識の間で夢を見る。夢の中はセイ川の向こうにメキシコの火山がある風景で、そこに三匹の犬が現れる。一匹目は少女によって刺繍の施された犬であり、二匹目は目を閉じたときに見える犬、そして三匹目は“no-dog”である。最初の二匹は火山の方へ走って行って消えてしまい、ベンに残されたのは三匹目の“no-dog”だけである。それはフォークを持った食人種の場面や雪原の狼の群れの場面になっても同様で、彼にはやはり“no-dog”しか残らない。昏睡状態から目を覚ましたとき、現実世界の彼には刺繍の犬もチキトも残されていない、全く「犬がいない」状態になっているのである。

トムとベンは現実世界に帰ってこなければならず、そのとき彼らには何も残されない。彼らは冒頭で失望するが、内的世界を失ったとき再度失望に陥り、トムはハティの名を叫び求め、ベンは飼うことのできない犬を思って涙

を流し、内的世界の喪失を嘆くのである。

また、彼らの願望の対象が変化していることも特筆すべきである。トムは、はじめは自宅の庭にピーターとツリーハウスを作ることを楽しみにしており、冒頭で家を出らなければならないときには、彼は家を離れるくらいなら自分もピーターと一緒に麻疹にかかったほうがましだと考える。しかし、真夜中の庭を見つけた後は庭のことばかり考え、夜が来るのを心待ちにしているのである。さらに、トムにとってピーターは“a remote boy with whom he could only correspond by letter, never play” (63)であり、ハティこそと一緒に遊べる唯一の友人となる。また、トムはときどきピーターのことを忘れてしまう。ピーターに手紙を書き忘れ、パーソロミュー夫人と話しているときにも彼の存在を忘れていたことに気づく。トムの滞在中、ピーターは彼が一番に望む遊び相手ではなくなっているのである。また、真夜中の庭を見つけた後は、家に帰ることを拒み、ピーターの麻疹が治ったにも拘らず、真夜中の庭に行く機会を得るために滞在を延長している。さらに、日中は独りになりたがり、庭のことしか考えていない。

‘Tom, you’ve been standing in a puddle all this time – quite a deep puddle!’ He was surprised: his head had been in the clouds – in the white clouds that pile above an eternally summer garden – and he had not been noticing his feet at all. (103)

この引用は、トムが庭のことを考えすぎるあまり足が水溜りに浸かっていることにすら気づいていない場面であり、彼が現実世界よりも内的世界に没入している様を描いている。真夜中の庭を見つけてからは、トムの願望の対象はピーターとロング家の庭からハティと真夜中の庭へ、すなわち現実世界のものから内的世界のものへ変化しているのである。

現実の犬でありながらブラウンはベンの理想の犬チキトとは似ても似つかない平凡な犬であり、ベンはその犬に満足することができない。彼は最初ボルゾイなどの大型犬を望んでいるが、チキトが見えるようになってからは次のように述べている。

‘They’re [Ben’s eyes are] tired of seeing things – the same old things – great hulking things, far too big – big, dull, ordinary things that just behave in the same dull ordinary way’ (83)

彼の興味の対象は大型犬ではなく、むしろそれを平凡なものとみなして否定しているのである。また、ベンは目を閉じればいつでもチキチトを見ることができるが、しばしば家族に想像を妨げられる。彼は独りになることを望み、満員電車の中に真のプライバシーを見出す。たとえ彼が目を閉じていても、他の乗客は彼に無関心で話しかけてくることはないからである。また、テリリーの子犬の一匹をもらうとき、ベンは色がチキチトに似ている子犬を選び、チキチトと同一視する。密かにその子犬を「ブラウン」ではなく「チキチト」という名で呼び、なぜそう呼ぶのかをフィッチ氏に問われたときにも“Because he’s going to be Chiquitito – he is Chiquitito.” (140)と答えるだけである。ベンはチキチトが見えなくなって本物の犬を手に入れてもなお、チキチトを切望しているのである。

このように、彼らの願望は内的世界で実現されているが、それは完全に満たされているわけではなく、内的世界のものに触れることができないという不完全さを伴っている。また、内的世界で願望が満たされたことによって、現実世界よりも内的世界を強く求めるようになり、それを喪失したときに彼らは再度失望に陥るのである。

4 . 現実世界への帰還

内的世界を失ったトムとベンは現実世界で願望を実現させる。トムは真夜中の庭を失ったが、翌朝思いがけずハティとの再会を果たすのである。今まではトムの遊び相手で、時には彼よりも幼かったハティが今やパーソロミュ夫人という老婆になっている。彼女は賃借人たちに恐れられ、頑固で怒りっぽいキトスン氏ですらも彼女を怒らせないようにキトスン夫人に注意している。パーソロミュ夫人は少女時代と同様に孤独に生きているのである。トムもはじめは彼女がハティと同一人物だとはわからず、彼女の話し方や身振りを見てようやく認識することができる。そして、真夜中の庭では何にも触れることができなかったが、最後の場面でキトスン夫人が述べているように、トムはパーソロミュ夫人を抱きしめているのである。パーソロミュ夫人

の話の聞いている間、トムは真夜中の庭がもはや存在しないことを認め、それを求めることもない。彼はハティとの再会によって遊び相手への願望を満たしているが、彼女は今年をとっており、彼女を遊び相手として受け入れるのは容易ではない。しかし、トムが彼女を受け入れ、抱擁を交わしたとき、彼女はまるで少女のようであり、真夜中の庭にいた頃から彼らの友情は変わっていないのである。

ベンはブラウンを譲ってもらい、犬がほしいという願望は満たされているように思えるが、ブラウンはすでにティリーと同じくらいの大きさで色も濃くなっており、ベンの望む犬ではない。ブラウンの方もベンを好いておらず、“He [Brown] felt himself in captivity, and feared his captor – a strange, whose voice and hands were without friendliness” (148)と描かれている。彼らの中にはベンが望んでいたような“companionship”はなく、したがって彼の願望はまだ満たされていないのである。ベンは自分の望む犬を飼っているコドリング家の息子やロシアの猟師、メキシコの少女を羨み、自分の理想とは異なるブラウンを恥ずかしく思う。彼が手に入れたのははじめに望んだ大型犬でもなければ、勇敢でも大胆でもない、むしろ臆病な雑種の犬である。しかし、ブラウンを連れて帰るとき、ベンはバスの中でその平凡な犬を膝に乗せ、駅やエスカレーターでは抱き上げるなど、ずっとブラウンに触れているのである。ベンはそのことに気づいていないが、ブラウンが彼のもとを離れようとしたときに本物の犬の暖かさや動きを思い出し、「チキチト」ではなく「ブラウン」という本当の名前で呼び戻す。最後の場面では、“Brown remained by his side, leaning against his leg, panting, *loving him*; and *lovingly* Ben said . . .” (154, emphasis mine)と書かれており、彼らの中には愛情が芽生えているのである。

彼らは現実世界で本当の“companion”を手に入れており、もはや孤独ではない。上述したように、孤独感は彼らが内的世界に導かれる原因のひとつであるが、これらの最後の場面ではトムはハティと抱擁を交わし、ベンはブラウンと家路についているのである。彼らははじめに内的世界で孤独を満たそうとし、トムは真夜中の庭でハティと様々なことをして遊び、ベンはチキチトの飼い主として一日中その犬を見ようとする。しかし、彼らは孤独感から没入してしまった内的世界のために自ら独りになろうとする傾向があり、現実世界における孤独感はむしろ悪化しているのである。彼らが真に孤独感から解放されるのは現実世界に戻ってきてからであり、トムは真夜中の庭にいる

ときにホームシックにかかったり、現実世界に戻れなくなったとき、自分の部屋に帰ってきていることに心から安心したりする。また、パーソロミュー夫人と話しているときにも、自分が本当は家に帰りたかったのだと気づく。彼には真夜中の庭の秘密を共有できるハティという友人がで、家に帰れば彼の家族が待っている。彼はもはやキトスン家でのアパートですら孤独を感じなくなっているのである。

『まぼろしの小さい犬』では、内的世界を失ってからのベンの葛藤がより細かく描かれている。彼の孤独が満たされるのは、彼がブラウンを受け入れたときである。それまでは、“the two of them went across the Heath, *together but not in companionship.*” (150, emphasis mine)と決して“companionship”という関係ではない。しかし、彼が何度もブラウンの名前を呼ぶとき、彼の頭にはもはやチキトは存在していない。

彼らは現実世界で“a real, flesh-and-blood companion”を手に入れている。パーソロミュー夫人はトムに触れ、“You’re real: *a real, flesh-and-blood boy*: the Kitsons’ nephew . . . And in the middle of last night.” (222, emphasis mine)と述べる。彼らはお互いを幽霊だと思っていたことがあり、そのことで口論になったとき、お互いに触れることができないことに気づき、そのことに関してはふたりの間で禁句になるほど衝撃的な問題である。内的世界ではトムは実体のない少年であったが、彼らが再会したときふたりは“a real, flesh-and-blood boy”と“a real old woman”なのである。

チキトもかつては本物の犬だったかもしれないと言われ、その刺繍の絵は“the representation of what had been *a real, flesh-and-blood dog.*” (49, emphasis mine)であるとされる。しかし、ベンの想像の中ではチキトは実体のない犬にすぎない。ベンが実際に手にしたのは平凡な犬であるが、その犬は本物の身体と暖かさを持ち、いわば“a real, flesh-and-blood dog”なのである。

彼らは内的世界で実体のない少女や犬で願望を満たそうとしたが、それらに触れることができなかった。現実世界で生身の身体を持ったものに触れること、いわば“touchability”とでもいうべきものが彼らを孤独感から解放するのである。このように、彼らは現実世界で願望を実現させることができ、現実を受け入れることで孤独感から解放されているのである。

結

『トムは真夜中の庭で』と『まぼろしの小さい犬』において、たしかに主人公のトムとベンは内的世界に入り込んでしまうほどに強力な願望を抱いているが、本稿では彼らの願望がどのように満たされているのかを中心に考察してきた。彼らの願望は現実世界と内的世界を通して繰り返し描かれ、実現されている。しかし、内的世界においては、そこにあるものに触れることができないという問題のために完全に実現されているとはいえない。さらに、彼らは自らの願望を満たしてくれるその世界に固執するあまり、願望の対象を内的世界のものに向けてしまうのである。ピアスは彼らを退屈な現実世界に引き戻し、再度失望に陥れる。しかし、悲劇的な結末を与えるのではなく、トムとベンにそれぞれ、年老いてしまったハティと平凡な犬ブラウンという現実を受け入れさせ、生身の身体を持った、触れることのできる“companion”によって彼らの孤独感を満たすのである。

このように、彼らは“companion”という最終的な願望の実現に向かって、喪失と願望の実現を繰り返している。作中に彼らの友人が全く登場しないことから、彼らにとって“companion”がいかに重要かが窺える。現実世界で孤独感から解放されたとき、彼らの願望は真に実現されるのである。

註

* 本稿は日本英文学会九州支部第 62 回大会（平成 21 年 10 月 24 日、於：宮崎大学）において口頭発表したものに加筆、修正を加えたものである。

¹ 児童文学作家であり、批評家でもあるジョン・ロウ・タウンゼンド（John Rowe Townsend）がこの作品に関して、“‘Masterpiece’ is not a word to be lightly used, but in my view Tom’s Midnight Garden is one of the tiny handful of masterpieces of English children’s literature.” (Townsend 240)と述べるなど、ピアス作品の中で最も評価されている。

² デイビッド・リーズとマーガレット・ミックはそれぞれ、“Achieving One’s Heart’s Desire,” “Promise and the heart’s desire: *A Dog So Small*”というタイトルでピアスの作品を論じている。

³ ピアスは“Writing a Book: *A Dog So Small*”において、“My idea didn’t look like a story; it looked like a person – a boy who longed to have a dog. It began with the longing itself, and at first that was all I knew of the boy. . . . I didn’t care about the boy’s appearance because I started knowing him from the inside – what he wanted, his thoughts, his feelings. . . .”

(Pearce 141)と述べている。

⁴ グリスウォルドは「小ささ (smallness)」のほかに、“snugness,” “scariness,” “lightness,” “aliveness”を挙げており、“These five themes or qualities in literature, looked at in a different way, can be seen as feelings or sensations prevalent in childhood.” (Griswold 3)と述べている。

参考文献

- Crouch, Marcus, and Alec Ellis, eds. *Chosen for Children: An Account of the Books Which Have Been Awarded the Library Association Carnegie Medal, 1936-1975*. London: the Library Association, 1977. 96-99.
- Egoff, Sheila, G. T. Stubbs, and L. F. Ashley, eds. *Only Connect: Readings on Children's Literature*. Toronto: Oxford UP, 1996.
- Fisher, Margery. *Intent upon Reading: A Critical Appraisal of Modern Fiction for Children*. Leicester: Brockhampton, 1964.
- Griswold, Jerry. *Feeling like a Kid: Childhood and Children's Literature*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2006.
- Inglis, Fred. *The Promise of Happiness: Value and Meaning in Children's Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 1981.
- Jackson, Brian. “Philippa Pearce.” *The Cool Web: The Pattern of Children's Reading*. Eds. Margaret Meek, Aidan Warlow, and Griselda Barton. London: Bodley Head, 1977. 314-24.
- Meek, Margaret, and Victor Watson. *Coming of Age in Children's Literature*. London: Continuum, 2003. 45-84.
- 三宅興子編著 『フィリパ・ピアス』(KTC 中央出版, 2004年)
- Pearce, Philippa. *A Dog So Small*. 1962. London: Puffin, 1964.
- . “Time Present.” *Travellers in Time: Past, Present, and to Come*. Cambridge: Green Bay, 1990. 70-74.
- . *Tom's Midnight Garden*. 1958. London: Puffin, 2005.
- . “A Writer's View.” *Why Do You Write for Children? Children, Why Do You Read?* Tokyo: 20th Congress of the International Board on Books for Young People, 1986.

69-72.

. "Writing a Book: *A Dog So Small*." *The Thorny Paradise*. Ed. Edward Blishen. Harmondsworth: Kestrel, 1975. 140-45.

Rees, David. *The Marble in the Water*. Boston: Horn, 1979. 36-55.

Rustin, Margaret, and Michael Rustin. *Narratives of Love and Loss: Studies in Modern Children's Literature*. London: Karnac, 2001.

Townsend, John Rowe. *Written for Children: An Outline of English-Language Children's Literature*. London: Bodley Head, 1995.

Wall, Barbara. *The Narrator's Voice: The Dilemma of Children's Fiction*. London: Macmillan, 1991.